

聖蹟の巡拝に思う

名 畑 応 順

○

基督教徒がパレスチナに巡拝したり、回教徒がメッカに巡礼したりするように、古来、仏教徒には仏蹟の巡拝ということがある。中国の入竺求法の高僧たちはいうまでもなく、わが国でも直接に渡天を企だて、あるいは敢行した人びとがある。しかしわが国では、むしろ入唐求法の人びとの、中国の靈地巡拝に見るべきものが多い。渡天の志願は果し得なかつたとしても、明恵上人の仏蹟に憧れた、ひたすらな情熱には敬伏されるものがある。行誠上人が、外国留学から帰られた南条先生の足を、この足が親しく仏蹟を踏んだのであるかと、頂かれたという話を、昔、先生から承ったことがあり、先生の懐旧録にも、そのことが記るされてあつたと思う。私はもちろ

ん、このような深い情熱があつたわけではないが、先年渡欧の途中、印度に立ちよつて、せめてブダガヤの大塔だけでも、拝みたいものと思つたが、季節がわるく、旅程がそれを許さなくて、僅かに一夜セイロン島に上陸して、仏寺に詣でただけで、思いを遣らねばならなかつた。

学生時代の末期に、五十日間、中国を旅行して、杭州、蘇州、南京、その他の地に遊び、廬山や泰山に登つて、古聖賢の跡を踏み、仏典や儒書に記るされる地理にまのあたり触れ得た感激は、いまに忘れることができない。それは後年、一箇年近くも北京に滞留して、随時、便宜を求めて、諸方の靈場に詣でたことよりも、さらに思い出の深いものがある。顧みれば、前回と後回とは、時代や年齢の差異もあり、行先きの生地か熟地か

の相違もあつたことだろうが、何よりも初めの場合、旅行の目的と気構えが、巡拝ということに専注されていたために、たとい期間は短かくても、聖地で受けたさまざまな印象は、後の時よりも、はるかに深く刻まれたように思われる。

辺鄙な山国でありながら、古くから真宗のご縁の深い土地に生まれ、宗祖のみ教えの下で育てられた私は、少年の時から郷里に近いところにある、いわゆる御旧蹟というものを聞かされ、その地を懐かしんでいた。お膝元といわれる根本の聖蹟である京洛の地、昔の地方の信徒は、一生に一度の参拝に感泣した、その京都の地にも、青年時代から久しく居住してみれば、何等の感興も懐かないほどに馴れてしまったが、北陸や東国の霊地には、常に心を惹かれ、その巡拝を念願すること、年久しいものがあつた。随つて何かの機会に、真宗の御旧蹟とされる場所に近づけば、つとめて参拝することにはしていた。しかしそれでは結局、ついであることになつてしまひ、何かと制約されることが多くて、心ゆくまで、しみじみと参拝することができなかった。

近年、わが真宗学会で二回まで、関東聖蹟の巡拝が行なわれ、ほかにも私の加わらせてもらえるような、団体

としての巡拝があつたが、私の健康では、きりつめた日程の下に、団体に加わつて、敏速に行動することが許されないもので、とかく好機を逸しがちであつた。しかしおい年は寄つてくる。待つていても、このうえ時期は到りそうにない。殊に昨年は記念すべき宗祖の御遠忌に際会した。そこで、その後一箇年半ほどの間に、思いきつて、学校の休暇を利用しては、主として東国、東山のめばしい御旧蹟を巡拝させていただいた。いわゆる研究旅行とか、史蹟踏査というような、いかめしいものではないが、私の身にとっては、ありがたい御縁の数々に触れ得られたことを慶んでいる。

○

私の郷里である、奥美濃の郡上という地方は、飛驒と越前との山地に境を接した、山また山の辺地で、断崖の多い長良川の溪流に沿つて、狭い天空の下を、奥深く分け入らねばならない。今日では、連年、災害があつて、たびたび不通になることがあつても、自動車もバスも通うようになってはいるが、往古の交通不便であつたことは、若い人たちには、想像もされないであろう。この地方に中古以来、真宗が弘伝せられて、御門徒が多く、近

年、よほど御法義が頼れたというても、まだまだ伝統の根強いものがある。私は夙^{しゆ}から、このような辺地に、古来、念仏の教えが伝わってきたということが、甚だ奇異に思えてならなかった。

大体、郡上の入口に当る南部から、南西、南東の地区は、臨済や曹洞の勢力範囲であつて、真宗の寺院も門徒も稀である。美濃市から八幡町に通ずる、表口の郡上街道に沿う地域でも、南部は殆んど禅宗に塞がれている。

北部の飛驒や、北西の越前の山間部は、およそ真宗で占められてはいるが、その流伝は郡上よりも少し後れたようである。親鸞聖人の弟子と伝えられる、嘉念房善俊という人が、いち早く郡上の白鳥方面に来て、念仏の教えを弘め、後に飛驒の白川に移つて、照蓮寺の開基となつたと伝えられている。嘉念房については、これを確かめる資料はないけれども、郡上や飛驒に現存する、蓮如上人や実如上人の絵像本尊の裏書に「飛州白川善俊門徒」と記るされたものを、まま見ることであるから、室町初期頃には、既にこの地方に、善俊という人の門流が、相當の勢力をなしていたことは、十分察せられる。郡上の開教は、あるいは鎌倉末期か、南北朝の初期までも溯るのでないかと考えられる。

私は当時の郡上地方における政治経済、産業交通等の社会史的な知識に疎く、この地に真宗の流伝を促進せしめた事情などは知らないが、一方に長滝寺という、天台の大勢力が蟠踞して、必ずやその圧迫も甚だしかったであろう時代に、この辺鄙な、そして民度の低い地方で、とにかく蓮師の弘化にも先立って、濃飛にまたがる真宗の一つの門流を形成するような種が蒔かれ、根が下ろされたということを、不思議に感ぜざるを得ないのである。そしてそこに並々ならぬ苦辛をされたであろう、遺弟の念力の深さを想い、郷土と御縁の厚い先徳の旧蹟を、懐かしまずにいられない。白鳥から北濃附近の地、飛驒の莊川の嘉念房の旧地照蓮寺、さては照蓮寺が移転した高山御坊など、私が若き日から、しばしば往来し、参訪してきた郷国の御旧蹟である。殊に高山御坊へは、旧崇敬部下であつた関係上、父祖の代から、幾つかの山を越えて、歩みを連んでいる。旧照蓮寺は近頃、御母衣ダムの工事で、高山に移り、室町時代の書院造りの本堂が、現存する真宗寺院の本堂として、最古のものといわれ、文化財に指定せられて、復元せられ、寺域が立派に整えられたが、山奥の草堂であつた時よりも、旧蹟としての観が乏しくなつたのは、遺憾である。高山御坊はた

びたびの火災で、往時の輪奐は見られないけれども、最近復興の途上にあつて、教区を挙げての門信徒の帰仰が窺われ、幸いに法宝物類が、よく保存されているのがうれしい。

蓮師の教化が郡上地方によく及んだことは、この地方の寺院にも、門徒にも、蓮師筆の名号の甚だ多いことでも察せられる。それは恐らく吉崎を中心とする、蓮師の行化が山地を越して伝えられたものであらう。土地の門徒は、昔から京詣りについて、吉崎詣りということを中心にかけてきたものである。

○

わが国には、平安朝以来、西国三十三所の観音の霊場を巡拝する西国巡礼や、弘法大師の遺跡を巡拝する四国八十八箇所巡りの風習が行われて来た。これらの巡礼者は、俗塵を離れ、身心を清浄にして、途中乞食しつつ、聖地を踏み、靈仏を拝して、利生を求めたり、報謝をささげたりした。別に三十三所や八十八所にかぎらなくて、このようにして諸国を廻り、托鉢巡礼することを、「修行」といい、その人を「修行者」と称したことは、意味深く思われる。恐らく僧俗を問わず、宗派を論ぜ

ず、廻国巡礼はよき修行であつたにちがいない。真宗において、宗祖滅後、ほどなくこの「修行」ということが行われた。即ち恵信尼の消息に「また光寿御前の修行に下るべきとかや、仰せられて候しかども、これへは見へられず候なり」と記るされているから、覚恵法師の修行に出かけられることは、かねてから企図されており、尼公もこれを伝え聞いて、越後で待ちうけていられたらしい。

正応三年三月に、覚恵法師（五十二歳）と覚如上人（二十一歳）と、父子同道して、宗祖の旧蹟を慕つて、巡拝の旅に出られたことが、慕婦絵詞や、敬重絵詞によって知られる。それは宗祖行化の旧蹟を慕うと共に、まだ上洛していない東国の門弟たちに対面して、宗義を語り合うためであつた。この時には坂東八箇国の外、奥州、羽州にまで廻られ、兩三年を経て、帰洛されたという。宗祖滅後、三十年前後にわたり、「根本の門弟は、もはら東国にみち、枝末の余塵は、やうやく諸邦に及ぶ」（敬重絵詞）という際に、この父子の東国巡拝は、いかにも時宜を得ており、修得されたところも、多大であつたにちがいない。

覚師はその後、乾元二年（三十四歳）に、父法師の使

節として、東国に下向された。この時は唯善が受けた、禅念の讓状を認める院宣を撤回して、改めて覚信尼の置文を確認する院宣を受けるために、東国門侶に勸進されたのである。尋いで徳治二年(三十八歳)に、覚恵が入寂されて後、覚師は一時困窮していられたので、伊達郡の了専、了意の二人に迎えられて、奥州に下向していられる。この二回は、あるいはいわゆる修行には加えられないかもしれないが、その後にも覚師は応長元年(四十二歳)の冬、氷雪を冒して、奥州に赴き、翌年正月、金沢と大網とで、如信上人の十三回忌の仏事を営み、元弘元年(六十二歳)十二月には、また奥州に下つて、翌年正月、大網で如信上人の三十三回忌を修していられる。とにかく覚師はあの乱世において、前後五回まで、東国から奥州まで下向されたわけであって、その行旅の苦辛はいかほどだったか測り知れない。(存覚一期記参照)

宗祖が坂東所々御徑徊の例として、本願寺の住持は代々東国御修行なされた、と伝えられる(実悟記)。覚師以後、本願寺の衰微時代のことは、精しく調べたことがないが、思うに本廟創立以来の代々にとつて、東国の巡拝は任職道としての、重要な修行でもあったことだろう。蓮如上人は、宝徳元年(三十五歳)、父存如上人に伴

なわれて、北陸へ下られ、更に自ら東国に向われたのが、坂東修行の初回である。当時は支援する信徒も少なく、草鞋ばきで徒歩せられ、永く足に草鞋のくい入った痕を残されたという。第二回の東国修行は、応仁二年(五十四歳)であつて、この時は期間が短かく、門徒も多くなつていて、乗馬を提供する者があつたので、さほど困難もなかつたようである。第三回には文明七年(六十一歳)、吉崎を出て、越中井波の瑞泉寺まで下向されたが、この頃は既に一宗が繁昌して、人びとが多数に群参し、毎日、五人十人と死者さえも出るという有様で、物騒になり、微行して吉崎に戻られたので、東国修行は中止されたわけである。(実悟記・御一期記・拾塵記等参照)。

蓮師が東国修行にかぎらず、転変流離の裡に、各地に広く行化して、辛苦されたればこそ、よく一宗の再興もなしとげられ、家庭の教育も行き届くこととなった。臨終の時まで、息男たちに、草鞋の瘡痕をとり出して見せられたことを、息男たちはいたく感銘し、かように御苦労あつて諸国の門弟もでき、一宗が繁昌することになつて、いま安穩に過すことができるのだと、御恩を喜んで戒心されたという。まことに身を以て示された、切実な教化であつた。

○

真宗の旧蹟は、宗祖が流論されて後、各地を行化されたうえに、その教化に浴した門弟が、諸方に散在したことで、いわゆる二十四輩、その他の聖蹟が数多くあるが、江戸時代に入って、社会情勢が安定し、諸国の往来も容易になると、宗徒の聖蹟巡拝は次第に盛んになったようである。殊に宗祖の遺蹟を辿るということは、宗祖の旅の辛苦を偲ぶという事で、ひとしお門徒に懐かされたのではないかと思う。空也や一遍もさることながら、由来、宗祖は旅の聖者として、民衆に親しまれた人である。

多屋頼俊兄の説によれば、真宗の妙好人は、宗祖のいかなる他の行実よりも、「石を枕に雪を褥」ということで、祖徳を感じていたといわれる。私たちも幼少の時から、説教によくこれを聞かされたものである。それほど痛切な忍苦、または寛容を示すことにはならぬかもしれないが、時折、耳にした、「ごんざうわらぢにがまはばき」というような、素朴な言葉で語られる、聖人の粗々しい旅装の形容も、山村の農民たちには、感銘深く聞かれたようである。これは昔の談本にでも出ていたもの

か、田舎の門徒に応じた、布教者の弁巧か知らないが、私は曾てこの言葉に関心をもったことがある。蒲で編んだはばき(脚絆)は以前に地方で見て知っていたが、「ごんざうわらぢ」がどういものか解らなかった。後に大言海を見たら、「ごんづ」の項に出ている。「ごんづ」は、沓の音便で、藁こぐつ、といったのが、連濁音便となつて、上略した語であろうと推定して、ごんづのづの音が訛つて、ずとなり、語源は忘れられて、「ごんずわらぢ」ということになったのだという。そして、「ごんざう」はごんづ草履の約略としてある。郷里の老農にきいてみると、「ごんざうわらぢ」というのは、爪先が沓のように被われた草鞋であつて、雪道に穿くもの、近頃でも、奥山里で用いるとのことであつた。いずれにしても「ごんざうわらぢにがまはばき」といえば、山河を跋渉するいでたちである。私の青年の頃に読んだ、当時の講者の談話にも「祖師聖人の御一生、竹杖草鞋のご苦勞」という言葉のあつたことを記憶する。漢語を用いただけで意味するところに大差はない。

このように旅の聖人を想い、ひたすら行路の難を以て語られる、聖人のご苦勞は、末世のわれわれに、本願他力のみ教えを聞かせるためのご苦勞であつたと、門徒に

ただかかれて来た。もとより聖人の崇高な人格は尊く、その求道の態度はありがたいにちがいないが、その門流にとつては、聖人のご苦勞によつて、みずから教化を蒙るといふことが、最も直接に忝なく感戴されるわけである。いわば真宗興行の徳というものが、庶民の日常生活に近く感ぜられる、旅の苦難という具体的な形で、説き伝えられて来たと考えられる。

句仏上人の「勿体なや祖師は紙衣の九十年」という句は、あまりにも著名である。上人は、しばしばこの句を笠と杖との画賛として、用いられている。「時雨るるや祖師が在世を思ふ時」という句にしても、寒い旅空に曠野を辿られる祖師を思い浮かべていられる。上人の祖蹟巡拝の句は多いが、その一つに「撰化利生の為めに、宗祖が、行脚せられしあとを、乗物にて順拝するは、いと勿体なく覚えて」とまえがきして、「祖蹟巡拝草鞋穿きたき蕎麦日和」と詠んである。撰化利生のためのご苦勞といふことから、これを受ける遺弟の身の懺悔が滲み出ている。「勿体なや」の句にしても、祖徳の讃仰にあわせて、わが身の懺悔が端的に現われているところに、長くこの句の愛誦される所以があるように思われる。

○
印度のサルナート初転法輪寺に数年を費やして、仏伝の壁画を描きあげた、野生司香雪画伯から、先年、聞いた話である。仏蹟を巡る人びとには、明瞭に三つの類型が見られる。その一は単なる遊覧を目的とするもの、その二は視察研究を目的とするもの、その三は信仰心から専ら参拝を目的とするものである。現地にてみると、この差別は来遊者の態度で、一見してすぐ解るといふことであつた。印度の仏蹟にかぎらず、どここの霊場でも、そこへ往来する人びとには、およそこの三種が見られることであろう。日本の社寺でも、近年、とかく觀光の対象とされることが多くなり、一時はいろいろの点で、随分問題にもされたが、この頃では、社寺の側でも、一般社会でも、あまり深刻には考えないようになつた。しかし觀光客の社寺への出入については、折々、情けない話を聞くことがある。それでも宗教というものに冷淡になつた今の時代に、せめては觀光といふことでなりとも、大衆にご縁がつけられるといふことは、考えられてもよからう。ただ願わしいことは、国宝とか、文化財とかに對する尊重ということにも絡むだろうが、祖先が苦勞し

て築いてくれた、尊い遺産に宿される深い心を、どれだけでも汲みとって、目標も方向も定まらないような、今日の人間の歩みを省みさせていただきたいものである。

視察研究ということになると、霊地も尊像も聖教も、単なる資料として取り扱われている。自然現象を探究するのと、何等の相違もないようである。自然現象に対しても、心ある学徒は、敬虔の態度を以て接している。まして宗教事象に関する研究が、恭敬の態度がなくて成り立つものであろうか。歴々の学者先生が、法宝物の取り扱いにぞんざいであることについての小言を、地方でしばしば耳にするのは遺憾である。

以前には、真宗の東国の旧蹟は、荒廃しているという歎きを、諸氏から聞かされたが、私の巡拝したところでは、若干の例外はあるけれども、大概は予想以上に整備されてあって、うれしかった。尤も、現在の諸寺院には原初の地から二転、あるいは三転したものがあり、中には一度廢絶したのを、後に再興したのもある。著名な旧蹟寺院でも、その本来の旧地を依然として保持しているものは、数指を屈するに過ぎないだろう。しかし歴世にわたり、諸種の動乱転変をくりぬけ、七百年の星霜を経て、とにかくその名蹟を維持されて来たのである。名

蹟によって、祖徳を仰ぎ、開基の功勳を偲ぶということも、無戒名字の比丘にとつては、いわれの深いことであり、参拝の慶びを感じずにいられない。

旧蹟に伝持される法宝物についても、いろいろの問題がある。一般の文化財、またはこれに準ずるような貴重なものにも、まま接しられ、宗内において、特に尊重すべきものは、もとより少くない。紛れもない宗祖や直弟の真筆、直作というようなものには、容易にめぐり遇えないにしても、それでも何か特殊な下心から、新らしく作為されたり、他から持ちこまれたりした形跡の顕著なものは別として、寺伝によって、古くから崇敬せられ、人びとによって、久しく尊重されて来たような法宝物には、さすがに頭のさがるのを覚え、またそれからいろいろの示唆を受けることもある。ただ製作の真偽、巧拙や年代の上下というようなことだけで、評価してはなるまい。

宗祖を中心とする、旧蹟地にまつわる種々の伝説にも、こころ留むべきものがある。それらには大概、奇端不思議を伴っているもので、現代の知性には、とかく疎んぜられやすい。しかし、それぞれの時処に応じ、機縁に随って、聖人の徳化が超自然的な靈用にまで仰がれ、

執筆者住所が掲載されているため
リポジット非公開とする。

受容されて来たことが尊まれる。御自身の上に、いわゆる神秘や奇蹟を語られなかった聖人ではあるが、ただ人でないと感じられた伝統の祖師たちの上には、やはり霊瑞不思議を崇めていられた。弥陀の来現と仰がれる聖人に対して、その遺弟が純真な心から、朴訥に奇瑞を語り

伝えたのも当然であろう。伝説の由来や意味を探って、説明を加えるということも、もとより閑却されてはなるまい。しかし、私には先ず以て、このような伝説に素直にうなずけないで、何か抵抗を感じるようになった、自身のさかしらを悲しまずにいられない。